

駒井哲郎「紙の上の宇宙」1971年 油田谷美術館（現原美術館）蔵 ©Tetsuro Komai 2018 / JMA1800117



Tetsuro Komai
: A Pioneer of Modern Japanese Copperplate Prints

ルドンを愛した
銅版画のパイオニア

 横浜美術館
YOKOHAMA MUSEUM OF ART

2018
10/13 Sat. — 12/16 Sun.
煌めく紙上の宇宙
駒井哲郎

駒井哲郎—^{きら}煌めく紙上の宇宙

Tetsuro Komai : A Pioneer of Modern Japanese Copperplate Prints

2018年10月13日(土) - 12月16日(日)

 横浜美術館

PRESS RELEASE



駒井哲郎《題名不詳》1971年頃 世田谷美術館(福原義春コレクション) ©Yoshiko Komai 2018/ JAA1800117

僕は銅版画が好きだ。うす薔薇色の鏡のように磨かれたほのかに光る銅版を見ていると版の上に色々のイメージが想像の裡に浮んでくる。

(駒井哲郎「銅版画」『アトリエ』1951年6月号)

日本における現代銅版画の先駆者である駒井哲郎(1920-1976)は、^{バイオニア}深淵な詩的世界が刻まれた版画により、国内外で高く評価されてきました。黒いインクと白い紙の豊かな表情のなかに立ち上がる、夢と狂気のあわいを彷徨う駒井の宇宙。それは、デジタル時代の今こそ観る者を魅了します。

駒井は銅版画を追求した一方、詩人や音楽家と交流し、総合芸術グループ「実験工房」での活動や詩画集の出版などで、文学や音楽との領域横断的な表現を試みました。またルドンをはじめ西洋画家たちへの敬愛も、駒井の芸術観の形成に深く関わっています。

本展では、初期から晩年までの駒井作品の展開を縦糸に、芸術家たちとの交流や影響関係を横糸とすることで、多面的な駒井の姿を捉えなおし、その作品の新たな魅力に迫ります。色彩家としての知られざる一面も、福原義春氏のコレクション(世田谷美術館蔵)を核とした色鮮やかなカラーモノタイプ(1点摺りの版画)によってご紹介します。駒井の版画作品や詩画集など約210点とともに、関連作家作品約80点を展示し、さまざまなジャンルとの有機的な繋がりにより紡ぎ出された、豊穡な世界をご覧ください。

本展のみどころ

1. 腐蝕の魔術師、駒井の幅広い表現を一望

銅版画と一口に言っても、その技法はさまざまです。駒井は多彩な銅版技法を駆使し、微妙な諧調の面と鋭い線、緻密な描写と幻想的な抽象形態、ストイックなモノクロームと色彩あふれる画面など、一見相反するような作風を同時並行で追求しながら、幅広い表現を生み出しました。他に追従を許さない駒井独自の腐蝕により生み出された、紙の上に匂い立つような豊かな表情。それは、デジタル時代を迎えた今だからこそ、私たちの心を揺さぶります。

本展では、日本における現代銅版画のパイオニアである駒井の作品の展開を初期から晩年まで6章構成でたどります。

2. 美術・音楽・文学の交差点

駒井は1950年代にインターメディアな前衛芸術集団「実験工房」に参加し、作曲家・湯浅譲二との共同制作によるオートスライドや、立体オブジェの制作を行っていました。また、50年代後半から70年代には大岡信や安東次男ら、多くの詩人たちと、詩画集の制作や詩集の装幀などのコラボレーションを実現しました。

本展は、駒井のジャンルを超えた表現に着目し、文学や音楽との領域横断的な特質を持つ、駒井芸術の魅力にも迫ります。

3. 美術評論家としての横顔、そして西洋美術と駒井作品の競演

駒井は、銅版画の歴史や技法について精通するだけでなく、西洋美術史の幅広い知識を持っていました。ルドンをはじめ、クレーやミロなど西洋画家たちの作品が駒井の創作へ与えた影響は少なくありません。また駒井は、敬愛する芸術家たちについての評論を美術雑誌などへ数多く寄稿しており、そこからは彼自身の芸術観を読み取ることができます。

本展では、駒井の文章を紐解きながら、駒井が敬愛した西洋画家たちの作品と駒井の作品を並べ、駒井が彼らから何を摂取し、またどのように独自の創作へと展開したのかを検証します。

作家プロフィール

こま い てつ ろう
駒井 哲郎

Tetsuro Komai

- 1920年(大正9) 東京市日本橋区(現・東京都中央区)に生まれる。
- 1934年(昭和9) 月刊誌『エッチング』第26号を通じ、初めて銅版画を知る。
- 1942年(昭和17) 東京美術学校(現・東京藝術大学)を卒業。
- 1947年(昭和22) 木版画家・恩地孝四郎を中心とした版画研究会「一木会」の同人となる。
- 1950年(昭和25) 春陽会第27回展に出品し、春陽会賞受賞。洋画家・岡鹿之助に激賞される。
- 1951年(昭和26) 第1回サンパウロ・ビエンナーレにて木版画家・斎藤清とともに受賞。
- 1952年(昭和27) 第2回白と黒国際版画展(ルガノ国際版画ビエンナーレ)にて、棟方志功とともに受賞。「実験工房」に参加。
- 1954~55年(昭和29-30) フランスへ留学し、銅版画家・長谷川潔を訪ねる。
- 1959年(昭和34) 東京藝術大学非常勤講師になる。
- 1972年(昭和47) 東京藝術大学教授に就任。
- 1974年(昭和49) 解説執筆と編集を担当した『ルドン 素描と版画』(岩崎美術社)が刊行される。
- 1976年(昭和51) 舌癌肺転移により死去。(享年56歳)



1967年12月 撮影:河川清巳

展覧会の構成

第1章 銅版画との出会い

駒井哲郎は1934年、14歳の時に、父親に送られてきた月刊誌『エッチング』を偶然目にし、はじめて銅版画を知りました。自身が後に回想するように、「他のジャンルの絵も描かないで、銅版画を始めることによって美術の世界に入った」駒井は、西田武雄が設立した日本エッチング研究所に通い、技術の手ほどきを受けます。また研究所に隣接する画廊において西洋のオリジナルの銅版画を間近に見る機会にも恵まれ、彼はたちまち銅版画の奥深い世界に魅了されました。

本章では、最初期の駒井作品とともに、彼が感化されたレンブラントやホイッスラーらの作品、西田のもとで学んだ日本人作家の作品を展示します。

主な関連作家

レンブラント・ファン・レイン／シャルル・メリヨン／
ジェームス・マクニール・ホイッスラー／西田武雄／須田國太郎／関野準一郎



駒井哲郎《河岸》
1941年、エッチング、23.2×36.1cm、東京都現代美術館
©Yoshiko Komai 2018/JAA1800117



ジェームス・マクニール・ホイッスラー《ブラック・ライオン埠頭》
1859 (1861/62) 年、エッチング、15.2×22.8cm、
町田市立国際版画美術館

第2章 戦後美術の幕開けとともに

駒井は1947年に、日本の抽象表現を先導した木版画家・恩地孝四郎が主宰した版画研究会「一木会」の同人となりました。木版を中心とした一木会においても、駒井は銅版画に取り組み、線を基調とするエッチングとは異なる、面の表現に適した新たな技法に挑戦します。また文学に親しむことで、作品の主題も、写実的な風景から、内的な心象風景へと一転します。技法研究の成果が、新たな主題と結びつくことで花開いた駒井の作品は、50年に春陽会展で受賞、翌年には第1回サンパウロ・ビエンナーレで受賞するなど、一躍脚光を浴びました。

本章では駒井による初期の代表作とともに、師である恩地や岡鹿之助、また同世代の版画家、清宮質文や浜田知明らの作品を紹介します。

主な関連作家

オディロン・ルドン／恩地孝四郎／岡鹿之助／清宮質文／浜田知明



駒井哲郎《東の間の幻影》
1951年、サンドペーパーによるエッチング、18×28.9cm、
横浜美術館（北岡文雄氏寄贈）
©Yoshiko Komai 2018/JAA1800117



恩地孝四郎《Lyrique No.22 かけらになつて幸福》
1952年、マルチブロック、71.8×62.6cm、横浜美術館

第3章

前衛芸術との交差

駒井は、1950年に詩人であり美術評論家の瀧口修造と出会います。以来、瀧口は駒井のよき理解者となり、現代美術としての銅版画の可能性に期待を寄せました。1951年に活動を始めた「実験工房」の名付け親であった瀧口は、翌年にそのメンバーとして駒井を推薦します。駒井は、1953年の「実験工房第5回発表会」にて作曲家の湯浅譲二との共作でオートスライド「レスピューグ」を上映、また『アサヒグラフ』のコラム「APN」のために、立体オブジェを制作しました。

この章では、「実験工房」における駒井の活動とともに、北代省三や山口勝弘など他の造形メンバーの同時代作品を紹介し、インターメディアな運動における駒井の立ち位置を確認します。

実験工房とは

1951年から57年頃にかけて音楽、美術、文学の枠を超えて若き芸術家たちが創造精神の詩的実験を展開した総合芸術グループ。顧問格であった瀧口修造のもとに、造形作家、作曲家、ピアニスト、詩人、照明家、エンジニアといった多彩なメンバー14名が集い活動した。

主な関連作家

パウル・クレー／北代省三／山口勝弘／湯浅譲二

第4章

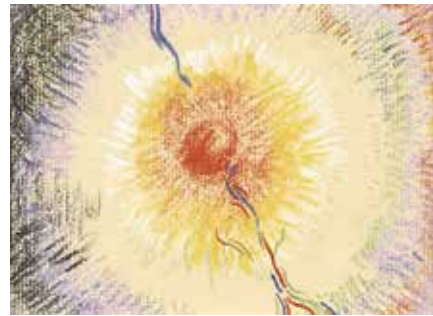
フランス滞在と「廃墟」からの再生

1954年、横浜港よりフランスへ出発した駒井は、パリに到着するとまもなく、憧れの銅版画家・長谷川潔を訪問します。長谷川の勧めを受けて、駒井はフランス国立美術学校に入学し、フランスでは銅版画の最も基本的な技法とされるエングレーヴィングの習得を目指します。滞仏中に駒井は、フランスにおける文化芸術の豊かさや伝統の重みに圧倒され、自信喪失に陥ります。しかし約一年半の滞在を終えて帰国後しばらくし、小山正孝による詩集のフロントピースとして《樹木 ルドンの素描による》を創作したことが転機となり、再生への一步を踏み出してゆきます。

本章では、駒井の滞欧作とともに、立ち直りの契機をもたらした一連の樹木のシリーズを展示します。

主な関連作家

ロドルフ・ブレダグ／オディロン・ルドン／長谷川潔



駒井哲郎《「レスピューグ」原画》
1953年、グアッシュ、パステル、紙、
12.6×16.4cm、世田谷美術館(福原義春コレクション)
©Yoshiko Komai 2018/JAA1800117



駒井哲郎《樹木 ルドンの素描による》
1956年、エッチング、24.5×20cm、
練馬区立美術館(栗津則雄旧蔵)
©Yoshiko Komai 2018/JAA1800117



長谷川潔《林樹》
1956年、エッチング、35×25.3cm、横浜美術館

第5章

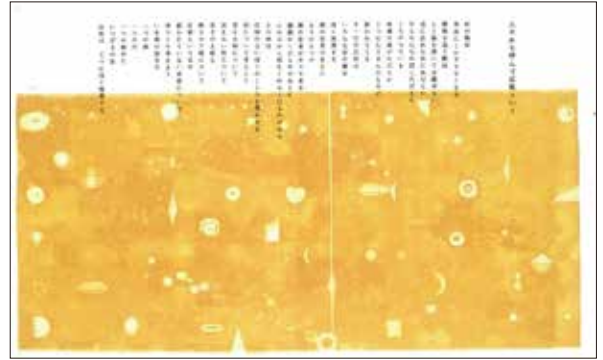
詩とイメージの競演

1958年、駒井は「書肆ユリイカ10周年記念詩画展」に、詩人・大岡信の詩に寄せた版画を出品しました。これを機に大岡と親交を深めた駒井は、その2か月後には詩人・安東次男に出会いました。安東と駒井は、詩画集『からんどりえ』、『人それを呼んで反歌という』を続けて制作し、お互いに刺激し合いながら充実した創作を行います。以降晩年まで、詩集に寄せた挿画や装幀など詩人との共作は、駒井にとって重要な制作の場となりました。

この章では、駒井が手掛けた詩画集や詩集を中心とし、詩人たちが愛蔵した駒井作品や、詩画集から展開した作品を展示し、言葉とイメージの競演をご覧ください。

主な関連作家

大岡信／安東次男／粟津則雄／福永武彦／埴谷雄高／金子光晴／谷川俊太郎



駒井哲郎《人それを呼んで反歌という（『人それを呼んで反歌という』より）》
1965年、サンドペーパーによるエッチング、33×50.3cm、
世田谷美術館（福原義春コレクション）©Yoshiko Komai 2018/JAA1800117



駒井哲郎《挿画2（『よごれてみない一日』より）》
1970年、ディーブ・エッチ、凹凸版刷（1版多色）
21.1×23.8cm、世田谷美術館（福原義春コレクション）
©Yoshiko Komai 2018/JAA1800117

第6章

色彩への憧憬^{しょうけい}

生前の展覧会や自選版画集では主にモノクロ版画を発表し、白と黒の造形をスティックに追求した駒井ですが、一方で1950年代より色刷りの版画も手掛けています。特に1970年代になると多色刷りのモノタイプを多数制作し、優れた色彩感覚を遺憾なく発揮しました。そこには、駒井の言葉を借りれば「晩年になって^{さんらん}燦爛とした色彩の世界を油彩やパステルで実現した」ルドンへの深い敬愛が感じられますが、モノタイプという版を介した表現には、版画に対する駒井の強いこだわりも表れています。

この章では、ルドン、クレイ、ミロ、エルンストといった駒井が愛した西洋画家たちと、駒井による色彩作品の響き合いをお楽しみいただけます。

主な関連作家

オディロン・ルドン／パウル・クレイ／ジョアン・ミロ／マックス・エルンスト



駒井哲郎《黄色い家》
1960年、ディーブ・エッチ、アクアチント（1版多色）、
21.1×16.1cm、世田谷美術館（福原義春コレクション）
©Yoshiko Komai 2018/JAA1800117



オディロン・ルドン《二人の踊女》
制作年不詳、油彩、カンヴァス、44.5×30cm、
横浜美術館（坂田武雄氏寄贈）



パウル・クレイ《大聖堂（東方風の）》
1932年、ガーゼ、油彩、厚紙に貼付し木枠に釘づけ、20×52cm、アサヒビール株式会社

関連イベント

1. 講演会「師・駒井哲郎の人と作品—銅版とpas de deux」

日時：2018年10月13日（土）14:00～15:30（13:30開場）
 講師：中林忠良（銅版画家）
 会場：横浜美術館レクチャーホール
 定員：220名（事前申込、先着順）

参加費：無料
 申込方法：ウェブサイト申込フォームより
 ※2018年9月1日（土）より申込受付開始

2. トークと詩の朗読「画から言葉が生まれるとき」

日時：2018年11月10日（土）14:00～15:30（13:30開場）
 ゲスト：文月悠光（詩人）
 会場：横浜美術館円形フォーラム
 定員：100名（当日有効の本展観覧券と整理券が必要）

参加費：無料
 参加方法：当日12時より総合案内にて整理券を配布

3. 学芸員によるギャラリートーク

日時：2018年10月26日（金）、11月17日（土）、12月1日（土）いずれも14:00～14:30
 11月23日（金・祝）18:30～19:00
 会場：企画展展示室
 参加費：無料（事前申込不要、当日有効の本展観覧券が必要）

4. デモンストレーション&トーク「駒井哲郎 版に刻まれた世界」

多摩美術大学で駒井哲郎の薫陶を受けた渡辺達正氏による、駒井哲郎の銅原版を用いた刷りの実演。

日時：2018年12月2日（日）13:30～16:00
 講師：渡辺達正（銅版画家）
 会場：市民のアトリエ
 対象：12歳以上
 定員：30名（事前申込、抽選）

参加費：2,000円
 申込方法：ウェブサイト申込フォーム、または往復はがき
 申込締切：2018年11月2日（金）必着
 ※2018年9月1日（土）より申込受付開始

5. 親子講座「小さな銅版画—モノタイプ版画に挑戦！」

本展でさまざまな作品を鑑賞したあとは、親子で小さな銅版画制作に挑戦しよう！
 最後に「市民のアトリエ・版画室」で駒井さんが使っていたような大きなプレス機を動かしてみます。

日時：2018年11月23日（金・祝）
 1回目 10:15～12:30
 2回目 14:15～16:30 ※1回目と2回目は同じ内容です
 会場：グランドギャラリー
 対象：小学校1～6年生と保護者

定員：各回10組 ※1組3名まで（事前申込、抽選）
 参加費：親子2名で2,000円（お一人追加で+500円）
 申込方法：ウェブサイト申込フォームより
 申込締切：2018年10月30日（火）

トピックス

11月3日（土・祝）は観覧無料！

2018年11月3日（土・祝）の文化の日は、横浜美術館の開館記念日です。どなたでも展覧会を無料でご観覧いただけます。コレクション展とあわせて芸術の秋をお楽しみください。

駒井哲郎—^{きら}煌めく紙上の宇宙

Tetsuro Komai : A Pioneer of Modern Japanese Copperplate Prints

会期 2018年10月13日(土) — 12月16日(日)

開館時間 10:00~18:00 (入館は17:30まで)

※2018年11月23日(金・祝)は20:30まで(入館は20:00まで)

休館日 木曜日

主 催: 横浜美術館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)、日本経済新聞社

助 成:  芸術文化振興基金、公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協 賛: SHISEIDO

特別協力: 世田谷美術館

協 力: みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、首都高速道路株式会社

チケット

	当日	前売	団体
一般	1,500円	1,300円	1,400円
大学・高校生	900円	700円	800円
中学生	600円	400円	500円
小学生以下	無料	—	—
65歳以上 (要証明書、美術館券売所でのみ対応)	1,400円	—	—

チケット取扱い

横浜美術館(前売りはミュージアムショップ)
セブンチケット(セブン・イレブン店内マルチコピー機もしくはウェブサイト)
イープラス(ファミリーマート店内 Fami ポートもしくはウェブサイト)
※電子チケット「スマチケ」もご利用いただけます。

特典つき

グループチケット

[対象] 一般/大学・高校生/中学生の前売・当日券の定価3名以上
[特典] 横浜美術館特製ポストカード(非売品)を人数分プレゼント
[チケット取扱い] セブンチケット(セブン・イレブン店内マルチコピー機もしくはウェブサイト)

※前売券販売期間: 2018年7月13日(金) — 10月12日(金)

※2018年11月3日(土・祝)は観覧無料

※団体は有料20名以上(要事前予約)

※毎週土曜日は高校生以下無料(要生徒手帳、学生証)

※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方(1名)は無料

※観覧当日に限り本展の観覧券で「横浜美術館コレクション展」も観覧可

※その他の割引料金については別途お問い合わせください。

横浜美術館

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1
TEL: 045-221-0300 FAX: 045-221-0317
<https://yokohama.art.museum>

プレスリリースお問合せ

横浜美術館 広報担当(水谷、藤井、一色)
TEL: 045-221-0319 FAX: 045-221-0317
E-mail: pr-yma@yaf.or.jp